

## 伯母

クオン・ヨソン

(辻本武 訳)

私はテウと結婚する前は彼の実家にしょっちゅう出入りしていたが、その時は彼の母方の実家にいるのは祖母一人だけだと思い込んでいた。だから彼の両親に初めてお会いした時、彼の母親は一人娘で育ったから性格がちよっときついみたいだと思った。相見礼(両家の顔合わせ)を中華料理店で行なった時、彼の母親が料理のコースや単品など全てのメニューを決め、父親はちよつと不満たらたらだったけれども、テウは何も言わずに母の決定に従った。

結婚して一ヶ月ぐらい過ぎて、テウは母方の実家に伯母と叔父がいるという話をした。つまり義母には姉と弟がいるという話である。この二人は私たちの結婚式には出席しなかった。伯母は家族と関係を断って二年になり、叔父は博打の借金で手配されているという。義母は息子の結婚を控えてこんな事実を嫁や姻戚となる人たちに知らせるべきかどうか悩んだ末、話さないことにしたというのだ。

「それで今になって、何故？」

「伯母が病院に入院したって。お母さんに連絡が来たそうだ。」

「どんなご病気なの？」

「お母さんは何も言わなかったよ。それは病気が深刻だという意味じゃないかなあ？」

「それは何とも言えないように思うけど……。」

私は曖昧に答えた。一度も会ったことのない人の病気について、こちらとして何も言いようがなかった。

「一日中、気になってねえ。僕は伯母さんが好きだったんだよ。」

テウの最後の言葉は、私に何か圧力をかけるようだった。そう思うと、博打の借金で手配中という叔父も近いうちに泥酔状態で夫に抱えられて我が新婚夫婦の家に現われるのではないか、という不安にかられた。

私は義母と一緒に夫の伯母の病氣見舞いに行くことにした。一度くらいは行くのが当然であろう。義母は合理的で剛毅な性格で、自分の意思を通す人だった。義母は病院までの道がややこしいからタクシーに乗ろうと言った。タクシーの中で、伯母さんはどこがお悪いのですか、と尋ねると、**脾臓癌**、という一言だけが返ってきた。どの程度進行しているのかとか、転移はしているのか等を聞こうとしたのだが、義母の顔を見て聞くのを止めた。タクシーから降りて病院の玄関

に向かつて歩き始めようとする時に、義母が口を開いた。

「姉さんは：。」

義母はしばらく身をすくめて、言葉を変えた。

「だから、お前の伯母さんに当たる人は気難しくはないけど、そうだといいて優しいということもない。誰かに迷惑をかけるのを嫌い、むしろ自分が損をしてしまう性格なのよ。」

そんな点は姉妹は非常によく似るものだと私は思った。

「うちはちよつと早く結婚した方なのだけれど、結婚してからは実家にはあまり帰らなかった。実家が嫌だったから。」

義母はこのように言つて私を見た。分かるかと聞くようでもあり、お前もそんなことはないかと探るようでもあった。

「姉さんはずうつと会社勤めをして、結婚もせず、お母さんのお世話をしてきた。その家にキョンチヨルという奴、だからお前の義理の叔父に当たる人のことだ。そいつがお金のことではいざこざが起きる度に：：、そうだ、今はお前には言えないというものがなくなつたのだから、そうだから何でも言えるね、姉さんが何回も弁償してやったんだよ。そうしたら：：。」

私たちはいつの間にかエレベーターの前に着いた。患者衣を着た三・四人が私たちと一緒にエレベーターに乗った。義母はエレベーターから降りてから、また話を続けた。

「あれは一昨年の秋のことだったのだけど、姉さんが突然手紙を一枚書き置きして家を出て、

どこかに行ってしまったんよ。絶対に自分を探すな、当分の間みんなとは関係を切って生きる、死ぬ前に一度でもいいからそのように生きてみたかった、心変わりをすれば戻って来る、まあそんな内容だった。本当に内容も驚いたのだけれど、だからあれは何と言うのか？お前は文章を書く仕事をしているから分かるだろう。それを何と言えいいのか？」

私はそれが何なのか分からなかった。

「文章のあり方と言えいいのか？文字でもなく、字の形でもなくて……。」

「文体ですか？」

「文体？そんなものを文体というのかな？うちには分からん。姉さんも昔は文筆家になりたかったんだよ。だからお前に会うと喜ぶかも知れない。とにかく姉さんの手紙を読んで、文体というのか何というのか、そこに染み込んでいる心や気分のようなものに、ぞくぞくと感じたのよ。それが性質の悪い悪口ではなくて、みんな普通を使う言葉ばかりだったのだけれど、おかしいことにそれが怖くて悲しかったんよ。うちはそれが何なのか、気になっていた。一体全体それが……。」

義母の話はそこで終わった。病室に着くまで、それが何だったのか一生涯懸命に思い出そうとしているようだった。

夫の伯母に当たる人は私が挨拶するのを見て、すぐに分かったというように首を縦に振った。

「あんただね！」

その言葉がちよつと馴れ馴れしく感じて、私は当惑した。義母はベッドに横になつてゐる自分の姉をじつと見下ろしていた。伯母も妹をはつきりとした目で見上げた。沈黙が続くと、私も伯母をじつと見てゐるしかなかつた。予想はしていたが彼女はひどく痩せており、皮膚の表面が荒れて皺が寄り、所々に白髪が混じる頭をそのままさらけ出して、まるで餓死寸前の猿のように見えた。義母とは二歳違いだというのが、二十歳以上は違つてゐるように見える。疲れてゐるのか目がしびれるのか、伯母は何秒かの間隔で目をつぶったり開けたりしていたが、落ちくぼんだ目を開けて何かを凝視する時は目の白目部分がほんのり青みがかつた。

義母がようやく口を開いた。

「入院費用は心配しないで、姉さん。」

「心配、するな。」

伯母がゆっくり言つた。聞き返したのか、それとも独り言だったのかは曖昧だった。

「そんなことを聞くと本当にうれいねえ。けれど、うちは退院するからね。」

「姉さん、どうか頼みますから。」

「お願いがあるのだが、お母さんには知らせないでくれ。あの人がうちの前で泣くのは見たくないの。」

そう言つて伯母は目をつぶり、もう開けなかつた。義母はそれから一分ほど立っていたが、帰ろう、と言つて病室を出た。短くて何とも言いようのない義母の病氣見舞いだつた。義母の気が

楽になったのか寂しかったのか、私には分からなかった。本当に不思議な姉妹関係だ。私は伯母の瘦せて皺だらけの手がシーツの外にゆつと出ているのを見て、一度握りしめてやりたかった。

「伯母様、私帰りますよ。」

私が手を握ってやると、伯母は目をぱつと開けた。何か膿んでいるみたいで濡れている眼球の中から青い光が蜘蛛の糸のように細く光った。

「お前、物書きだつてね。」

「本格的には書いていないですけど、勉強はしています。」

「うちの家に一度遊びにおいで。」

「あ、はい。」

伯母が笑ったのか顔をしかめたのか、見当がつかない表情をした。

「うちの家に人を招待するのは初めてだ。」

「あ、はい。」

「死体の片付けじゃないから、遊びにおいで。」

「はい。」

「やれやれ、来るな、来んていい！」

猫の目のように気が変わる伯母の口ぶりに、私も思わず意地になって尋ねた。

「いや、何故ですか？」

「うちは真剣になつて言っているのに、お前は関係ないという顔をしてるじゃないじゃないか？」

「違いますよ。いきなり言われたからですよ。行きますから。」

「そうか、もう行きな。」

「そうではなくて、イモニム（伯母様）の家に遊びに行くということですよ。」

「イモニム、とは、何……」

伯母が何か呟いた。

「はあ？」

「イモ（伯母）」と呼びな。音の数も半分になるし語感もいいじゃない？もし遊びに来るといふなら、今メモして。ユン・ギョンホ、京畿道安山市……」

伯母が退院してから、私は彼女の家を定期的に訪問した。その期日は彼女が決めたのだが、一週間に一回、月曜日の午後であった。彼女は普段は毎日家の近くの図書館に行くのだが、月曜日が休館日だという。私は結婚準備段階から大学院を休学していた事情で、時間に余裕があった。おそらく私が生きてきた三十年のうち、その時が一番のんびりした時だった。

伯母は安山市の郊外にある小さな古アパートで暮らしていた。十坪ちよつとの室内はよく整頓されていた。いや、よく整頓されていたというよりは整頓するものがほとんどなかった。彼女の

家には、ないものが多かった。テレビもコンピューターも携帯電話も固定電話もなかった。当然通信ケーブルやインターネットも繋がっていなかった。それではニュースはどのようにして見るのかと聞いてみると、図書館に行つてそこにあるコンピューターで見ているという。エアコンどころか扇風機もなかった。彼女の家にある家電製品というのは、旧式の冷蔵庫と洗濯機だけであつた。洋服ダンスもなかったが、壁に取り付けられている押入れだけで十分なのだつた。家のなか全体が修道女の部屋のようにがらんと空っぽだつた。食器や鍋は何個もなかったが、そのためなのか身についた習慣なのか、彼女は食器を洗うことがあれば溜めないで直ぐにその場で洗い、洗濯物があれば洗濯機を回さないで手で洗つた。

伯母の家を初めて訪問した日はちよつと寒かつたが、彼女はお湯を入れただけのインスタントコーヒーに砂糖を添えて出してくれた。彼女は私にどんな家族なのかとか、テウとはどのように知り合つたのか等を聞いた。私は両親と兄がいて、夫とは友人の紹介で出会い、知り合つてから一年もならないうちに結婚することになつたと答えた。

「そうか、うちが家を出るまではテウにはガールフレンドがいなかつたねえ。最初の一目でえらく好きになつたようだね。それで、お前はあの子を何と呼んでるの？新婚だから周りの人の鳥肌が立つような呼び方をしてるのではないのかね？」

私はちよつと恥ずかしそうにしながら、ダーリンとシルラン（お嬢さん）を合わせて、**、**ダ  
ランイ、と呼んでいると答えた。



「ダルランイ、と呼ばば、ダルラン（そそっかしい）走って来るんだらうねえ。」

結婚もしていない彼女の口から飛び出す意外な冗談に、私はビックリした。しかし彼女の表情は何も悪戯をしているようには見え、話し方も天気の話をするのと同じように自然だった。

「お前の性格を見ると、外ではそう呼ばないのがいいだらうよ。ダーリンとシルランと合わせた言葉なんてことも言わないで。みんな、うちと同じように思ってるだらうし。ダルランイはダルラン（そそっかしい）と聞こえるだけだから。」

伯母とあれやこれやと話を聞いてみると、私はいろんなことで驚いた。彼女はまるで修道女のように暮らしていた。朝起きて先ずは水を飲んで一本目のタバコを吸い、それから二〇分ほど朝の運動をするという。それは運動というよりは彼女が自分に最も適合していると思う姿勢と動作で構成される一連のストレッチ体操であった。朝食を簡単に作って食べ、食器を洗い、一〇時ごろにカバンを背に担いで図書館に行く。カバンに筆記道具と財布、鍵を入れ、麦茶が入った水筒を用意する。

「本のほこりのせいなのか、そこに長いこと座っていると、喉が渴くの。」

私は、それは膀胱癌の症状の一つだらうと思った。

図書館に行けば、まずは書架で本を選び、席に座って一日中その本を読むのが彼女の日課だった。内容や面白さとかのようなものとは関係なく、最初から最後までみんな読む。理解が出来なくても字は読むことが出来るのだから、一文字、一段落、一頁、一節ずつ順番に読んでいく。午後

二時ごろに一旦家に帰って昼食を作って食べ、また図書館に行つて閉館の六時まで本を読む。本をみんな読み終わらなければ、貸出しで持つて帰り、夕食を作つて食べて寝入る時までには全部を読む。図書館の休館日である月曜日以外に、彼女が図書館に行けない事情というものはない。

タバコを一日に四本だけ吸うが、朝起きて一本目、昼食を食べて一本目、夕食を食べて三本目、寝る前に最後のタバコを吸う。酒は週に一回、日曜日の晩に焼酎一瓶ほどを飲む。その日はちよつと贅沢なつまみを作つて食べることもあると伯母は言つた。

「以前はほとんど料理をしなかつたねえ。してもいい加減に作つて、味も分からないで急いで食べていたからねえ。」

そして一人暮らしをしてから、料理に興味を持つようになったという。料理を作る時、彼女はこれ以上ない平穏な気持ちになる。料理は火と水と材料にだけ集中せねばならないものだ。彼女は料理をすればするほど、料理が創造的な作業だと思えるようになった。同じ料理を反復して作つても決して同じ味にはならないという事実が、彼女を失望させるどころか更に魅了した。彼女はひたすら自分だけのために料理をし、一人分の料理を作るにも真心を込めた。自分一人分だからといっていい加減に作れば、その分美味しくない。彼女の冷蔵庫にはいつも出し汁が入つており、また洗つて水気を取つたり湯搔いたり干したりした野菜や海産物など多様なものがあつた。彼女はたくさん食べる方ではないので、ある日は一時間の手間暇をかけて作つた料理が結局は鉢半分ほどの量しかなかつた海鮮粥だつた時もある。

「量は大了たことないけど、味はそうではないよ。」

彼女は自信たつぷりに話すのだが、それは事実であった。私は彼女の家でたった一回だけ夕食をご馳走になったことがあるが、おかずはイシモチの煮つけとシレギ（大根の干し葉）の味噌汁だった。値の張るイシモチではないのに身にヤンニョム（薬味）が染み込んで甘く、シレギの汁は深く風味のある味であった。イシモチもシレギも旬の時にまとめ買ひして、自分で日に干して作ったものだと言う。

しかし私が何よりも驚いたのは、彼女の生活費だった。ちよつと見ただけでも質素な暮らしだと感じるのだが、彼女は一ヶ月に六五万ウォンだけ使うのだという。更に驚くのは、そのうち三〇万ウォンは家賃で出ていくことであった。小遣いではなく、一ヶ月の生活費として残りの三五万ウォンだけでどのようにやっていけるのか、私には理解できなかった。テウと結婚して一ヶ月過ぎて、私は月に生活費がどれくらいかかったか計算してみても驚いたことがある。浪費らしい浪費はしていないのに何を減らせばいいのか分からず、言葉も出ないほどだった。銀行引き落としで見るとも触ることもなく消えていくお金は予想外に多かった。ところが生活費が三五万ウォンとは、私たち夫婦の住んでいるアパートの管理費と携帯電話の使用料を合わせただけでもそのくらいになるのだ。

「そんなに難しいことでもないよ。計算的には一日に一万ウォンずつ使うと考えればいいのだから。五万ウォンは管理費で出ていくからね。夏はそれより少なく、冬はそれより多くなる。」

タバコとコーヒー、米とキムチ、トイレットペーパーと石鹸、健康保険など日常的に使う費用を除けば、一日に実際に使うお金は一万ウォンの半分である五千ウォン程度だという。私は何も言えなかった。五千ウォンなら、タクシーに乗って何キロか走れるぐらいのお金だから。

二回目に訪問した時、私はコーヒーやケーキ、ビールやタバコなどをいっぱい買って、持って行った。しかし彼女はそれに手を付けず、持って帰るように言った。

「お前が良かれと思って買ったのは分かっている。しかしうちは自分の貧乏に慣れていて、それが嫌ではない。うちら、お互い付き合っている間だけは対等で正直になろうよ。うちはお前が文を書くということが好きを持っているし、血縁ではないということでもっと好きになっていく。血が繋がっていたら完全に対等で正直になるとというのが難しいんだよ。ひよっとしてお前がこの家に何かこっそり置いていたり、最悪の場合、お金のようなものを置いていたりすれば、その時はうちがどんなに残酷な人間なのか分かるようになるんだよ。お前が自分で食べるおやつを買ってくるのはいい。その代わりに自分でみんな食べていかないと駄目だよ。」

そのようにして彼女と私は二ヶ月余り、それなりに対等で正直に月曜日の午後に彼女の家で会い、薄いブラックコーヒーを飲みながら話を交わした。人の生き方を簡単に要約して書くことが可能であるのなら、伯母の生き方こそが最も簡単に要約して書ける人生ではないかと思う。

私がお会いしたことのない伯母の父親、だから私の夫の外祖父は少々自閉的な面があった人だ

ったという。その鬱憤と劣等感のためなのか分からないが、とんでもない酒飲みだった。酒を飲むと、生きてるのが悪い、嫌だ、と大声で喚きちらした。人の悪口を言ったり乱暴を働いたりはないが、ただひたすら、生きるのは嫌だ、嫌なんだ、と叫ぶだけだった。

伯母の母親すなわち夫の外祖母は私もお会いしたことがあって、私たちの結婚式にも出席してくれた。私は、その方は非常に献身的に働くのに自分のそんな面を人の前では口に出さない謙遜的な性格の人だと思った。そんな私の印象を語ると、伯母は残念な話を聞いたかのように口を一字にし、そして言った。

「まあ、それほど間違った話ではないと思う。犠牲精神の塊だった昔の女性だから。博愛的な面もあり忍耐力も強いのだよ。大切なことは何のための自己犠牲なのか、ということよ。何か一つに対してだけ排他的であることで博愛的になるのか、ということだろうね？」

伯母は自分の母親について特に話をしようとしなかったが、それも義母と似ている。

ともかく、そのような両親のもとで長女として生まれた彼女は、大学一年の夏に父親が酒に酔って道で行き倒れて亡くなったために、自分が一家の家長の役割をしなければならなかった。大学を卒業すると大企業の広報室に就職し、五五歳で忽然と消えるまでの人生はずうっと結婚することなく母親の世話をしながら生きた。そしてこの二年間は行方をくらまして一人で暮らし、臍臓がんに罹り三ヶ月間闘病した末に亡くなった。これが男のような名前を持ったユン・ギョンホ、彼女の一生の要約である。

もちろんこの伯母の一生にも少くない紆余曲折があった。彼女から直接聞いたのではないが、夫と義母から細切れに聞いた話を総合すると、彼女は大企業に入社して四・五年の間は家族の生活費と弟や妹の学費を出してやった。弟と妹の大学での勉強が終わると、金銭的支援を打ち切った。しかし弟が事業を起こして不渡りを出したために、――義母はそれが不渡りではなく博打の金だと確信していたのだが――、とにかくその借金のせいで弟が刑務所に行く時に、伯母はそれまで貯めていたお金と、そして会社を辞めて受け取った退職金をすべて弟の借金の清算につき込んだ。その後は、何年かごとに職場を変え、色んな出版社に勤めた。しかし彼女の母親、だから私の外祖母が彼女に黙って書類を作って弟の保証を立てたためにその借金に振り回され、三九歳で不良債務者としてブラックリストに載った。それから非正規職で働きながら弟の借金を返していったのだが、全部返すのに十年近くかかった。彼女は信用を回復して児童向け出版社に就職した時は、もう五〇歳に近かった。その時から彼女は誰にもお金は一銭も出さなくなった。義母によれば、おそらくその時に伯母は家族との関係を断ち切って一人で生きる決心をしたようだという。独立の準備のために、彼女は誰にも一銭のお金も出してやらず、そして自分のためにもお金も使わず、がむしやらにお金を貯めた。だから彼女の母親、すなわち私の外祖母は食堂の厨房で働いて生活費を稼がねばならなかった。そして前述したように、一昨年の秋に伯母は手紙一通を書き残して消えた。弟すなわち私の夫の叔父が博打の借金に追われて義母に電話して、死ぬとか生きるとか大騒ぎした次の夜の夜に。

伯母は五年の間に一億五千万ウォンほど貯めたのだが、一億はアパートの伝賃（借りる際の保証金で、家賃を払わない）を払い、残りの五千万でお金が尽きるまで何の仕事もせずに勝手気ままに生きてみるつもりだった。一人暮らしては、彼女の一生で初めてのことだった。

電話がないので、誰も彼女に連絡を取ることができなかった。訪問客や宅配業者、郵便配達員がインターホンを鳴らすこともなかった。しなければならぬ仕事も、守らなければならぬ約束もなかった。何もかもが彼女の時間を拘束したり、中断させることは出来なかった。自分の前には何年もの月日と時間が、霧のかかった平原のように広がっていると実感してからは、彼女は過去にどっぷりと浸かった。

彼女はぼうつと座って昔の出来事を思い起こした。昔の出来事が次から次へと思い出すのであった。彼女は時間が過ぎるのも忘れて過去に深く没頭し、しばらく経ってからようやく夢から醒めたように今の現実に戻るのだが、そうなると自分に対し非常に腹が立ち、その怒りを和らげられない恨みで胸があふれんばかりであった。

「私が家を出て、最初のうちは鉄道の枕木みたいに決まり切ったことを繰り返すように生きてきたのではないのよ。そうだからといって自由に生きてきたのかといえば、それも違う。希望がなければ自由もないのよ。自由があったとしても果てしない暗闇のように、何の意味も楽しみもないのよ。あの時私は遊び回ってお金を全て使い果たして、すぐに死のうとばかり考えていたの。」

しかし少しずつ変わってきて、今のように枕木みたいに決まり切ったことで毎日を生きるようになったんだけど、それはいくら考えてもあの日の晩からのことだったねえ。」

今から私は彼女から聞いたその冬のある日の話をしたい。彼女はその話を私に聞かせた時は、急がずゆっくりと言葉を選び、あの時どんな感覚だったのかが理解できたかどうかを確認するため、私の眼をしょっちゅうのぞき込んだ。その度に彼女の白目からは明け方の空のように澄んで冷たい青い光が光った。私もまた彼女に催促したり質問したりすることなく、静かに集中して話を聞いた。

その日は初めから奇妙な日だった、と伯母は言った。

朝、伯母がベランダに出た時、外の世界は夜中に降った雪で白く覆われて、全てが激しい寒波の中ですっかり凍っていた。タバコを吸い、部屋に戻って手を洗おうとしたが、温水が出てこなかった。彼女は廊下に出て、計量器ボックスに二重に取り付けた凍結防止シートを剥がして計量器ボックスを開けてみた。幸い、計量器は割れていなかった。古いアパートなので廊下に防風サッシ扉が設置されておらず、部厚い布で計量器を包んで凍結防止シートをかぶせておいても凍ってしまっただ。

彼女は厚着して市場に出かけた。雪はすっかり止んだが、天気は少しも暖かくなく、恐ろしいほどに気温が低くて、目がしびれる程に陽光が強かった。文化センターの前のベンチに年取った



ホームレスが座っていた。センターの行き帰りに何度も見る男だった。彼はいつも酒に酔って独り言を言っているのだが、大体が誰かの悪口だった。たまに彼は頭を上げて「もしもし、もしもし」と、通り過ぎる人に向かって大声で呼ぶこともあったが、その声はタバコの煙のように喉から噴き出すガラガラ声だった。誰も彼の呼ぶ声に応じず、その吐く息が人の腹をえぐり取る毒ガスのように漂って自分の体にくっついてはいけなないと、急ぎ足で立ち去った。

その日に限って彼女は彼にちよっとお金を恵んであげようと思つてカバンから千ウオン紙幣を取り出した。彼女が手袋の手で紙幣を差し出すと、彼はゆっくりとポケットから手を出して手のひらを上に向けたまま親指と人差し指を鉄のように伸ばして紙幣の端をつまんだ。所々にあかぎれが走る手のひらに、焼いた炭の粉のような斑点の黒い垢が溜まっていた。紙幣を離れた瞬間、彼と目が合ったが、寒さで涙がにじんだ彼の濁った目を見ると、彼女はぎよつとして慌ててその場を離れた。今にも彼が「もしもし、もしもし」と大声で呼ぶようだった。

彼女はドライヤーと三杯の延長コードを買つてきて、台所の水道栓を温水にひねり、玄関ドアを開け放して延長コードを家の中のコンセントとドライヤーにつないだ後、計量器ボックスの前に腰を下ろした。ドライヤーの高温強風のスイッチを入れて温水計量器の上からゆっくり円を描くように回した。計量器が割れていなかったのだ、いつかは融けるのだ。彼女は時々ドライヤーのスイッチを消して、家の中に開けておいた水道栓から水が出てくるかどうか確認した。

ビニール袋を持った若い女が慌ただしい足取りで廊下に出て来て、彼女に水が出ないのかと尋ねた。彼女は湯が出ないと答えた。若い女はドライヤーの音のために聞き取れなかったのか、そのまま立っていた。彼女はドライヤーを消して、湯が出ないともう一度言ってやった。女はちょっと驚いたようにきよんとした表情になっていたが、それは女の目が魚のように大きく飛び出ているから余計にそのように見えたのだった。「それではお水もお湯も出ないようですね」と魚の目の女が尋ねた。彼女は癩癩が出そうになるのを抑えて、水は出るが湯が出てこないと言った。三回目も同じこと言った。女が頭を傾げて「あら、うちはお水が出てこないのですか」と言った。だつたら直ぐに温めて融かしたらいいと言うと、女の顔に恐縮しながらも笑った。「うちの家の計量器は何ともないです！」女は目をぱちくりさせて、「お水が断水しているのね」と言った。

彼女はあきれて、そつちのも凍っているだろうし、うちの計量器も見た目には全く大丈夫に見えるじゃないかと言った。若い女がすぐに顔を寄せてきて、彼女の計量器ボックスをのぞき込んだ。女の髪の毛が彼女の頬をくすぐり、ビニール袋から鳥の唐揚げの匂いが漂ってきた。「これ、中が凍っているのですか？」女は目を大きく開いて見た。近くまで顔を突き出してくるので女の息が彼女の顔にかかり、女の飛び出た目玉が今にもビー玉のように転がり落ちるようだった。人とこのように接近するというのは、本当に久しぶりのことだった。

彼女は急に女の肩を押しのけたい気分になり、女はそれを察したかのように急に上体を起こして急ぎ足で走って行くと、一軒向こうの玄関ドアを開けて入っていった。しばらくすると、女の

夫と思われる若い男が出てきて、軽量器ボックスの凍結防止シートを剥がして蓋を開けてのぞき込んだ。魚の目の女がドライヤーを持って出てくると、「お水はどっちの方ですか？おばあさん」と聞いた。彼女は聞こえない振りをしように思ったが、結局は下の方だと行ってやった。

魚の目の女は家に帰って行った。彼女は轟音を発するドライヤーを持って上の方の計量器を、向こうの家の男は下の方の計量器を温めて融かした。彼女は時々ドライヤーを消して台所の方を見て水の音が出ていないか確認したが、向こうの家の男はドライヤーを頻繁に消したり点けたりしながら自分の家に向かって「出たか？出てないか？」と叫んだ。二十分近く経ってようやく彼女の台所の水道栓から水が出てくる音が聞こえてきた。彼女は計量器を布でいねいに巻いて計量器ボックスを閉め、凍結防止シートを再び取り付けた。家に戻って玄関の扉を閉める前にちらっと横を見ると、男はドライヤーを計量器ボックスに差したままタバコを吸っていた。男がひよっとして有難うと挨拶するかと思っただけだったが、男は意識的に避けるような仕草をして、背中を向けた。すっかり冷めた鳥の唐揚げを食べることに腹を立てたかも知れず、寒くて苛立っていたのかも知れなかったが、彼女は何か男が自分に怒っているように思えてならなかった。ひよっとしたらその男は、お金がかかっても水道事業所の人を呼んで計量器を交換しようと思ったのかも知れない。彼女は男の背中を睨みつけ、ぞくぞくとする憎悪が湧き出るのを感じながら家中に入った。

あれはいつだったのだろうか。彼の下宿で、果物ナイフでマクワウリの皮を剥いて切り、中の

種を一つ一つ取り出しながら彼の背中と腰をじつと見ていたあの春は：。彼女の人生で一番輝き、黄白色の水彩画のようだったあの春の日の午後は：。そんなことを思い出しながら：：彼女が玄関の隅に立って頭をうなだれ、手袋をした両手を交互に握って離した。手袋の中の冷たくなった指が震え、今すぐにでも果物ナイフをつかんで何かを突き刺したくなるような、黄白色を赤暗い色に変色させた憎悪が一体何なのか分からず、彼女は右手で左手を握って離し、そして左手で右手を握って離したのだった。

伯母は私とその背中と腰の男性に深い関心を見せるのに気付いた。

「その彼は腸が弱くてマクワウリの種を食べたら腹痛になるのだけれど、甘いものが好きで、マクワウリの果肉を食べたがったのよ。だからマクワウリの種を一つ一つ取り出してやらねばならなかったの。うちが会社で代理をしていた時だったから、二十六か七ぐらいの時よ。その時に会って、四・五年ぐらい付き合ってたのだけれど、会社勤めの人じゃなくて、何か研究する人だったねえ。」

私は伯母がその彼と分かれた時期が、あの叔父が事業の借金か博打の借金かのために刑務所に行かねばならなかった時ではないだろうかと思つた。研究者だからお金を稼げなかっただろうし、伯母が貯めていたお金も全てなくなり、伯母は会社に勤めることも難しくなっていたのだから、結婚ははるか遠ざかったのだった。黄白色の水彩画の夢は、そのように暗赤色の夕日のように消

えてしまったのだった。

「別れてから、その彼をたった一回見たことがあるの。偶然に、何かのイベント会場の入り口だったと思うのだけれど。」

彼の横には、あの時までには彼の妻ではなかったはずの、幼な顔で背がすらりとした女が立っていた。その当時は女性たちがブラジャーの紐を出すのが珍しかったのだが、その女は紫色のブラジャーの紐が見える黒いタンクトップにワイン色のミニスカートをはいていた。女は他の人たちと話を交わすこともなく、一人ぼっちだった。後からちらっと見ると、子供みたいに非常口の階段でぴよんぴよんと跳びはねて遊んでいたが、短いスカートの中で太ももが動く度に黒いパンテイーがちらっと見えた。周囲の人たちがその女の子は一体どこの誰かという視線でちらちらと見ている。その時、その彼と付き合っていると、結婚するとか、前夫との離婚が問題になっているとか、そういう噂が立っていた。伯母はその女の行動が人の視線を意識した演技だと分かって嫌悪を感じ、そんな不可解な行動をするバツ一の女に目を向けることは出来なかった。

その後、その彼とその女が紆余曲折の末に結婚したとの噂を聞き、しばらくしてから誰かがその夫婦の家に遊びに行つて子供や家の中の様子を見たところ、本当に子供が子供を育てるようである心配だったという話を聞いた。そしてまた彼女は、知り合いのSNAのミニホームページで、後輩が死んだ、で始まるメッセージ文を読んだ。その知り合いがSNSに載せた追悼文によると、交通事故で、運転していた妻は重傷を負い、助手席に座っていた後輩が死亡したというのであつ

た。まさかあの人ではないだろうかと名前を検索してみたところ、彼が在職している大学と訃報記事が出てきた。ところが、それがいつの時だったのかいくら思い出そうとしても分からないと伯母は言った。

「四〇歳をとくに過ぎていたのは確かなのだけれど、四六くらいだったのか、四八くらいだったのか。」

ともかく伯母より二歳年上のその人は四八だったか五〇だったかよく分からないが、それくらいの年で亡くなった。彼の死を知ってから、彼女は知人を通じて知った彼の妻のSNSに入っていて、その妻が書いた記事をすべて読んだ。文章は上手ではなかったがたくさんの記事を書き載せており、旅行にしょっちゅう行っているのか写真も多く載せていた。しかしいつからか、その女がフェイスブックに移り、伯母もそれに付いてフェイスブックに加入し、二人はフェイスブック仲間までになった。

伯母がその女のフェイスブック記事を最後に確認したのは、自分が家出するより一・二年前だったという。その女は意外にもアメリカに住んでいた。その時が韓国の選挙シーズンだったのか、その女は在外国民投票をして、韓国人であることが誇らしいという記事を載せており、その時も彼女は深い嫌悪を感じながら、その女が書いた文章とその下にある一五八個の意味のないコメントを全部読んだ。そしてそれを最後に彼女は再びフェイスブックをすることはなかった。

私が、伯母の年齢でSNAとフェイスブックをしていたという事実には驚きを表すと、伯母はち

よつと偉そうな表情をした。

「お前がテウと同一年ということなんだけど、うちはテウが四歳の時にコンピュータを買った人間だよ。その時は、アレアハングル（韓国の1989年頃のワープロ文字）がなくて、ポソククル（アレアハングル以前のワープロ文字）を使ったね。お前は分からないだろうが、ハイテル（韓国通信公社のインタネットサービス）とチョンリアン（韓国デイクムのPC通信オンラインサービス）とかの通信を始めたのは三十五、六ぐらいで、ある時は通信中毒にゲーム中毒までになったんだよ。ブログは面倒臭いから途中で止めて、SNSをちよつとしてツイッターとフェイスブックに乗り換えたの。実は、うちは家族と関係を断つことよりもオンラインの関係を断つのがもつと辛いと思ったぐらいだったねえ。それは誰かに与えられたものではなく自分が選んだものだし、うちが書いた記事とうちが見せるイメーজだけで全てが構成された宇宙だったのだから。」

計量器のせいで遅い朝ご飯を作って食べ、ベランダでタバコを一服してから部屋に戻ったら、上の階の家のベルの音が響いていた。接触不良なのか、何かの不注意のせいなのか、しばしば上の階のベルの音がインターホンから聞こえることがあったのだが、その日に限ってベルの音は止まらずにずっと鳴っていた。一時間以上その音を聞いて、彼女は管理室に行った。管理室の当直者である年取った男は、もう少し後で技術者を派遣して措置をするので連絡先を書いておいてくれ、と言った。連絡先はないと言うと、だったらどうやって連絡を取って訪問できるのか、と尋

ねた。彼女が、問題となる家が私の家ではなく上の階だから上の階の家を訪ねたらいいと話をすると、とにかく分かった、一旦帰って待つように、と言った。管理室から戻ってきてから三十分過ぎて中年と老年の技術者二人が彼女の家を訪問し、二人は原因究明をしましょう、と、いきなり家の中に入ってきた。

「その二人が、うちが一人暮らしを始めてから家に入り込んできた最初の訪問客だったのよ。」  
彼女が自分の家のインターホンではなく上の階の家のインターホンに問題があるかどうかとどれほど訴えても、二人は、お宅のインターホンにも問題があるかも知れない、と、こちらの言うことを聞かず、インターホンが取り付けられているところに走って行って、十分に聞こえるのにインターホンにわざわざ耳を当てた。うーん、本当にベルの音が聞こえるなあ、聞こえる、上の家に間違いはないか？、分からない、下の家かも知れない、どれ、俺が聞いてみよう、聞いてみる、聞いてみる、隣の家ということもあり得るが、そうだろうね、二人は代わり番こにインターホンに耳を当てて音を聞いては考え込み、ちよつと時間が経って、分かった。上の家と下の家、右隣の家と左隣の家に行つて確認してみなくては、と厳めしい顔で出ていった。それからしばらくの間、二人がどこかの家でインターホンを数十回繰り返しテストをしているのか、訳の分からない妙な音がインターホンから聞こえてきたと思つたら、結局は最初に聞こえていた音に戻つた。  
二人はまたやって来た。老年の方が、まだベルの音が聞こえるか、と尋ねた。彼女が聞こえると言うと、二人はまた遠慮もせず家の中に入ってきて、直接音を確認した。上の家だなあ。上



の家、'、そうだ。上の家だね、二人は互いに見合つて頷いた。二人は、下の家と左右の隣家に行つてみたら異常はなかった、上の家のインターホンの受話器がずれ落ちているに違いない、けれども上の家には人がおらず何の処置も取ることが出来ない、'という話を並べ立てて、顔を赤くして満足そうに帰つて行つた。

六時間以上もベルの音がずっと鳴り続けた。彼女は自分の日常を攪乱するこの事態を憎悪して、瞬間的にインターホンをはぎ取つて床に放り投げ、足で踏みつぶす自分の姿を見た。いや、見たというより、そのように行動する自分の筋肉と実際の生々しい怒りを体験したのであった。彼女は恐怖におびえ、服を着替えてカバンを持って何も考えずに一旦家を出たが、また家に戻つて水道の栓をひねつて水を少し流れるようにしておいてから再び家を出た。耳にはベルの音が響き、彼女は上の家に行つて火を付けてやりたい衝動を抑えるのに必死であつた。

文化センターの前のベンチには誰もいなかった。彼女は年寄りのホームレスがいた場所に座つた。しかし寒くて一分も我慢できず、文化センターの建物に入つて行つた。日曜日なので文化センターは閉まっていたが、一階の図書館は開いていた。そこは図書館というよりも小さな閲覧室と言つた方がいい所で、暖かく静かだつた。閲覧席は半分以上が空いていた。彼女は書架から実用的な哲学書を選んで席について読み始めた。記者と作家の序文を呼んだ。時間は薄く水っぽい粥のように止まることなく、さあつと流れていった。彼女は本を繰り返し読んだ。

ある瞬間に時間が流れを止めて、徐々に固まり始めた。第三章の中間部分を読んでいる時、彼女は凝固した時間が粘度を高めて全身を締め付けてきていると感じた。このような感覚はかなり昔にもあったと思ひ出したが、それが何なのか分からなかった。過去から現れて出てきた透明な幼虫の群れに襲われたような感じだった。彼女が一番我慢できないものが正にそのような感覚だった。「特に破廉恥な主体によく現われる」という文章を読んだ時、彼女は席から立ち上がって声を出しそうになった。何か行動を起こさねばならないというか、このままじっとしては駄目だと焦る思いだった。しかしどんな行為をせねばならないのかも分からなかった。彼女は金縛りにあったようになり、脂汗を流し、かろうじて唇を震わせて声を出さずに心で呟いた。もしもし：もしもし：：、それは何かを慰める呪文のようであった。その呪文は効き目があったのか、また時間が流れ始めた。もしもし：：もしもし：：。

どこからか小さな音楽の音が聞こえてきた。彼女は自分の耳に聞こえてくる幻聴だと思った。しかし音楽は途切れることなく、段々と大きくなった。何人かの人が椅子から立ち上がってカバンを片付けるのを見て、やっと彼女はそれが図書館の閉館時間を知らせる音楽だと分かった。

彼女は全部読み切れなかった本を持って司書のところに行き、貸出の申し込みをした。司書が利用者カードを出しにくれと言ひ、ないと答えるや、利用者カードがなければ貸出できないと言った。司書は二十代後半の青年で、頭が大きく体は痩せており、しゃべる時は舌が短いという感じだった。利用者カードをどのようにして作るのかと問うと、今日はもう閉館時間で明日は休館日

なので、明後日に来て作るように言った。彼は年の若さと短い舌に似合わず非常に事務的な口ぶり、メガネをかけた顔には何か責任を回避したい気持ちを仕事の忙しさのせいにしてしようと焦りの表情をした。それは彼女が一番よく知っていた。自分が四十代の時にずうっと鏡で見えてきた、生気に乏しく艶のない非常勤職員の自分の表情だった。

彼女は急いで酒とつまみを買い、家に戻って来た。幸いにベルの音は止んでいて、水道栓からは水が流れ落ちていた。彼女は疲労困憊の体で、お総菜屋で買って来た蟹の醤油漬けを取り出して酒を飲んだ。少しずつ酒が回り、彼女は立てた膝に腕を斜めに置き、その上で頬杖をして屈みこんだ姿勢で思い出に耽った。

深夜に泥酔して誰かの車の車に乗せてもらったことを思い出した。それ以前にも以後にもそんなことはなかったのだが、どういう訳かその日は怖いと思わずに人の車に乗せてもらった。深夜なのでほとんどの車が疾走する道路の横で彼女は車を止めようと手を振ると、あるシルバーの車が止まり、運転手が助手席の窓を開けた。彼女が乗せてくれと言うと、運転手はしばらく躊躇ったが、首を縦に振って同乗を承諾した。こんなことは簡単にしてもらえないものではないかと思っていたのに、いとも簡単に起きたと彼女は思った。あるいはまた一度は酒に酔ってトラックのタイヤの下で寝て、このトラックがブルとエンジンをかけて出発したら、と想像したことがあった。そんな想像をしても恐ろしいとは思わず、それはただ想像しているだけで自分には起きる訳がないと

考えた。そう思っているながらもひよつとして実際にそんなことが起きて、トラックのタイヤが自分を踏んで乗り越えたとしても、そう、それはそれ程に凄いことではないのかも知れないと思つた。そしてまたある時は手帳やメモ用紙に「私は」という字を書いたびに自分の足が萎えて立ち上がるのが出来なくなる恐怖のために、しばらくは「私は」という言葉を書くことも出来ず、果ては口に出すことも出来なかつた時があつた。これらの全ての記憶はいつの事だつたのかはつきり分からないが、非常に若かつた日の出来事であつた。

酒を飲みながら彼女はちよつと興奮状態に陥つた。一人暮らしを始めて以来、たった一日でこれほど多くのことが起きて、このように多くの人と話を交わす日はなかつた。彼女は老人のホームレスと魚の目の女とその夫を思い出した。なかに、おばあさんと呼ばれることもあるわ。彼女は首を縦に振つた。管理室の年取つた当直者と、カフカの『城』に出てくる助手たちのように愚かで気の合う二人の技術者と、舌の短い司書を思い出した。彼らは適当な距離を置いて眺めて見ると、それなりに可愛いところがある隣人たちであつた。彼女は急にブラジャー紐の女のフェイスブックにまた入つてみたくなつた。ノートブックを買つてインターネットに繋がねばならぬと思つた。よくよく考えてみれば、我々みんなが個性あふれる隣人たちでないか。

彼女が心弾ませて醤油漬け蟹の殻の中の黄色の卵と内臓を口に入れた時だつた。自分を見詰める誰かの目を思い出した。彼女は口の中のものをごくりと飲み込み、巨大な圧搾機で顔を挟むぐらいに歯で咀嚼し、そのとんでもない力で舌先を嚙んだ。目の前がぴかっと光つたら、すべての

記憶が指輪のような小さく黒い円形の輪の中に吸い込まれた。ひどい痛みだった。注意して指で舌先を触ってみると、唾と一緒に血が出てきた。舌先に熱く薄い鉄片がくっ付いたような感じだった。

彼女は痛みが消えるのを待ちながら、今さっき自分を見詰めた誰かの目の記憶をたぐり寄せた。その目は年取ったホームレスでも、マクワウリの種の男でもなかった。もっと昔のことだった。本当にはるか昔のことだった。舌先のひりひりとした痛みは少しずつ鈍くなり、口の中では錆のような感覚が広がりながら昔を思い出した。そこは地下の飲み屋だった。表面が剥げたテーブルとカビの臭いが漂う紫色の布に被われた椅子が置かれていた。彼女はタバコを立てて吸い、向こう側には一人の男が座っていた。

彼は痛切で寂寞な目をしながら、彼女に向かって両手を差し出した。手のひらを上にしたままテーブルに置いた彼の手はミサを行なう司祭のように見えた。彼女はテーブルの前に座った。彼が両手を彼女の方にもう少し前に差し出した。彼女は彼のすぼめた両手を見下ろした。そして自分にも分からない衝動がこみ上げ、吸っていたタバコを彼の左の手のひらの真ん中に押しつけて消した。彼の瞳孔がぱあっと開き、顔に痙攣が走った。彼女は彼をじっと凝視した。生温かい温度でアイロン掛けした時のように彼の表情が徐々に平べったく伸びたと思ったら、苦痛に黙々と耐える者の無表情な顔となった。しかし無表情といってもこれだけはどうしようもなく、片方の目から涙がほろりと流れ落ちた。驚いた彼女が彼の手のひらに焼酎を流し込んだが、すでにそこ

にはリングの形の黒い焦げ跡が付いていた。

「たぶん大学1年の冬頃だった。その子は地方から上京した学生で、同じ科の同期生だったの。どんな理由なのか分からないけど、うちを好きになったようなのよ。」

伯母は、今はもう彼の顔を全く覚えていないと言った。目や口、唇のようなものの形は言うまでもなく、普通だったのか不細工だったのかという全体的な印象も記憶になかった。しかし地下の飲み屋でのあの瞬間になると、彼女は一つ残らず覚えていた。彼が向こう側のテーブルでちよつと屈むように背中を曲げて両手を差し出した姿勢、丸く縮こまった肩の様子、彼女がタバコの火を彼の手のひらの上でもみ消した時に彼の顔に出た驚きと痙攣、徐々に平べったく伸びた表情と片方の目から流れ落ちた涙、灰とタバコのヤニで手のひらに出来た丸い跡、鼻先に漂う何かを燃やした臭い。

彼女は自分が火傷をしたように驚愕して店外に飛び出して建物のベランダに行き、タバコを吸う自分が何故そのようなことをしたのかを考えた。自分に対して好意を持っている彼に、何故？握ってくれると思つて差し出した柔らかい手のひらに、何故？ 彼女は思わず自分の左の手を広げて、またすぼめた。そしてタバコを一服吸ってから頭を上げ、空を見た。夜空は全てを拒否する瞳のように黒く、固く凍っていた。彼女は目をつぶりながら自分の左手を漏斗のようにすぼめ、手のひらの一番深い所にタバコの火を押しつけて消した。

「その子を焼いた理由は単純だったのよ。煩わしいし、面倒くさかったからよ。単にそれだけだったわねえ。」

伯母が亡くなってから、私は彼女が毎日通ったという文化センターの一階にある図書館に行ってみた。窓際にはコンピューターの座席が六席が一行に置かれ、その後ろに四人用の机四つと十六脚の椅子があり、壁に沿ってU字型の開架式書架があった。コンピューターを利用する人が三人、閲覧席に座っている人が七人ほどだったが、老人もいるし、コンピューターの前で遊んでいる小学生もいるし、まるで住民の憩いの場のようなだった。

私は伯母がいつも座っていたという閲覧室中央の四角い柱の横の座席に座りたかったのだが、そこには既に長い髪に太った体格の二十代半ばの女性が座っていた。私はその若い女性から一つ置いて、窓が見える席に座った。室内が狭く、座席の間に衝立もなく、離れて座っていても他の人の息や本のページをめくる音が聞こえた。私はノートを取り出して何か書こうと思っていたが止めて、ぼんやり窓の外を眺めた。二月であるから外は荒涼とした風景であった。伯母は荒涼の二月をここで二回過ごしたのである。

私は伯母から聞いた話をテウにしてやらねばならないと思ったが、実際にどのような切り出せばいいのか分からず、躊躇ってばかりいた。このままでは永遠に出来ないかも知れないと思った。伯母自らもあの冬の晩のことについて何度も同じ話を繰り返して、その度に前に話したこととちよ

つと違っているのではないかと聞き、私もそのようだと答えた。ひよっとして記憶というのは、言葉に出してから時間が経つと、いつの間にかその中身が変わるように初めから組み立てられていくのかも知れない。

最後に彼女を訪問した時、彼女は非常に衰弱していて一度には数個ずつの言葉しか出てこなかった。その時に彼女が言ったことは、以前に言ったこととまた違っていた。

「うちも初めから、こんなことをしなかっただろうに。不可触賤民のように誰にも触ることが出来ないように、何もしなかっただろうに。うちのせいでもなく、社会のせいでもないんだ。けれど、うちが煩わしくて面倒くさいからといって、誰かを殺さなかったこと、だいたいが。そのままちよつと焼いただけよ。手のひらだったけど、すぐに治っただろうねえ。そのことが私を、生きるようにさせたんだと：。」

彼女は私に、唇に水を湿らせてくれと手振りで言い、私はガーゼに麦茶を濡らして彼女の口に当ててやった。

「ここは本もない。喉が渴いたよ。」

彼女は生まれたばかりの子犬のように、目をつぶったままガーゼを吸った。

「それで、あれは何か：：うちを生かすようにした：：あの嫌なもの：：」

その時の伯母の顔は、以前に義母が彼女の手紙の話をしながらその文体から感じられる恐ろしくて悲痛な感情が何かを一生懸命に思い出そうとしていた表情と似ていた。伯母はやがて睡眠な



のか昏睡なのか分からない状態になり、義母が見舞った次の日の明け方に息を引き取った。

伯母のアパートの保証金と通帳に残された現金は、彼女が書き置きしていた遺言の通りに相続された。本来は最優先順位である実母に全てを相続させなければいけなかったのだが、伯母は実母に三分の一、私の義母に三分の一、そしてテウと私に三分の一を相続させると指定した。実母は私たちと話し合った際に、遺産を分けずに自分の一人息子の借金の返済に全部充てようと言った。しかし義母は断固として拒絶し、私たちがあれほど辞退したにも拘わらず我が夫婦名義の通帳に遺産を入金した。

通帳に入金された数字を見て、私は大変心を痛めた。一ヶ月に三五万ウオンだけを使ってきた彼女なら、九年五ヶ月を生活できる金額であった。その八桁の数字じつと見ていると、それは彼女と社会の間を、そして社会と私の間を、最後には悲しみと懐かしさのなかで彼女と私の間を分け隔てている、はるかに遠くて決して触ることの出来ない果てしない距離の数字であるようであった。